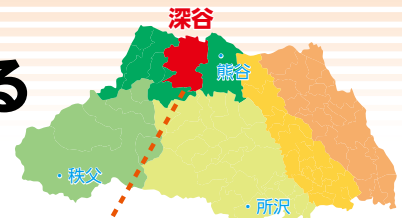


イチ押し

地域経済の活性化を語る

県内首長に聞く リレーインタビュー②④

深谷市 小島 進 市長 (53歳)



深谷を元気なまちにするために先頭に立つ小島 進市長

時代の転換期における「まちづくり」

私は市長を務めていて、つくづく、いまは時代の転換期にあるなあ、と感じています。昭和40年代までの高度経済成長期であれば、人口も自然に増え、税収も伸びる。そうなれば、近隣の自治体とあまり違いのない市民サービスと、安心安全の確保を図ることが地域の行政にはよかったのだと思います。

しかし、いまは昔と異なり、少なくとも県北は人口が減り始めています。これについて私は大変強い危機感を覚えています。東京に近く、農業が盛んで自然が豊かにあるという、県北の優位性を活かしながら、人口増と税収増を目指した夢のある施策を実現しなければなりません。

そのために、私は、大きく分けてふたつの施策が必要だと考えています。国の施策と似た表現になりますが、内需拡大と外貨獲得策が必要といえるでしょう。

まず、深谷における内需拡大策は、中心市街地の活性化です。地域の人たちが、これといった目的がなくても集まれるようなスペースを作ることが大切だと思います。

現在、深谷の市街地では、区画整理が進んでいますが、私は、ハード整備にあたる区画整理を活かすソフト面、知恵を大切にしたい

と思います。たとえば、区画整理にともない生じる空き地の利用法です。私は、これまでのような、単に、契約駐車場を作るといったことではなく、市民が集えるコミュニティスペース「深谷ベース」を作りました。また、市民・民間事業者を対象として、まちなかが元気になるアイデアを募集し、優れた提案者に市有地を提供する「深谷市まちなか活性化事業」を行いました。そして、今年、まちなかに「ドッグラン・ドッグカフェ」ができることになりましたが、これは全国的に見ても珍しい試みなのではないでしょうか。このような空き地利用の施策については、市民のみなさんと一緒にまちをつくることができているという実感があります。

今後も引き続きハードの区画整理はしっかりとスピード感をもって進め、深谷市や近郊の人たちが、潤いを感じる空間を作ることができればいいと考えています。

経済の起爆剤としての花園アウトレット

もうひとつの外貨獲得策は、花園インターチェンジ (IC) を中心とした拠点整備プロジェクトです。事業の核として、アウトレットモールを誘致することで多くの経済波及効果が生まれます。平成30年のオープンを目標にしている、それまでに秩父鉄道の新駅を設置し、推定650万人の来場者と1500人程



花園アウトレット構想図。平成30年オープンを目指している。

度の新規雇用創出を見込んでいます。

さらに、このプロジェクトはアウトレットモールの誘致だけにとどまりません。アウトレット誘致は、あくまでも手段に過ぎません。目的は、「できるだけ多くの人に花園インターで下りてもらうこと」にあります。

たとえば、平成21年度全国消費実態調査によれば、1世帯の「他の市町村（県外）」での購入割合は、奈良県が1位で、次が埼玉県となっています。言い換えれば、埼玉県民は、県内よりも県外で使うお金が多く、その割合で日本全国ワースト2位ということになります。花園ICでも、関越高速道路利用者の90%は花園の上を通り過ぎるだけで下りません。これをどうにかして、市内で消費してもらえようになりたいと思います。

そのための仕掛けの一つが観光面の整備です。今年の6月には富岡製糸場が世界遺産に登録される可能性が高いといわれています。この富岡製糸場の生みの親ともいわれる渋沢栄一は、ここ深谷市が故郷ですから、県北から絹遺産群で連携し、観光客を呼び込めるよ



深谷ねぎ畑と、ゆるきゃら「ふっかちゃん」。「ゆるきゃらグランプリ2013」4位の実力を誇る。

うに環境整備を進めているところです。

もう一つが「深谷ねぎ」で知られている農業です。雪害でダメージを受けたとはいえ、年々売り上げは伸びています。きゅうりも全国で2位の生産量ですし、あまり知られていませんが、夏に収穫される「白なす」も十分にブランド化していけるでしょう。加工品販売、流通、PR戦略まで視野に入れば、花園ICの整備は農産品の6次産業化にも寄与する可能性が高いといえるのではないのでしょうか。そして、これはまだ私の夢に過ぎませんが、この「安全・安心」な深谷の農産品を将来、輸出したいと考えています。まだクリアすべき点が残っていますが、そのときのためにも準備だけは進めていきたいと思います。

県北の発展が埼玉の発展につながる

ここまで話したことを、すべて市だけでやろうとしても、それではダメです。市民の理解と汗と知恵がどうしても必要です。

深谷市では、地域を好きになってもらい、なおかつ地域のために、汗をかこう、知恵を出そう、一緒にやっというと思える仕組みを作るために、協働推進部という新しい部署をこの4月に作りました。私自身も市民のみなさんに「このまちに生まれてよかった」と思ってもらえるようなまちづくりを進めていきます。やりがいを感じながら務めていますので、深谷を元気なまちにするため、先頭に立って頑張りますよ。県北の発展が埼玉の発展につながると信じていますから。

さて、今回は、若いころからともに勉強し合い、意見をたたかわせてきた間柄で、20年来の友でもある、隣まちの吉田信解本庄市長にバトンタッチしたいと思います。



渋沢栄一の生家「中の家（なかんち）」。深谷市は、世界遺産登録の見通しとなった富岡製糸場のある富岡市等と連携し、観光地整備を進めている。

深谷市の概要

人口（平成22年国勢調査）	144,618人
世帯数（同上）	50,859世帯
平均年齢（同上）	44.4歳
生産年齢人口比率（同上）	64.7%
面積（同上）	138.41平方キロメートル
名目市内総生産（平成23年度市町村民経済計算）	4,558億600万円
事業所数（平成22年工業統計）	283事業所
製造品出荷額等（同上）	1兆2,033億2万円
事業所数（平成24年経済センサス）	5,512事業所
年間商品販売額（平成19年商業統計）	2,965億6,100万円